

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運輸省の認可を得て雑誌社第六二七号  
昭和三十一年十月一日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成十八年十月一日発行(第百九十九巻第十号)

# ホトトギス

十月号



## 俳句随想 〔二百九十二〕

汀子

ホトトギス系の俳誌は多い。私の許に送られてくる毎月の俳誌は膨大な数になる。私はそれらを必ず拝見している。その中でどのような活動をされ、どのような文章を書き、どのような俳句を載せて居られるかを拝見するのが楽しみである。我々は必ず毎年歳をとる。若い人達の集まりだと思っていた俳誌がいつの間にか高齢化してくるのは仕方がないのであるが、雑誌の中で何時も若手新人に門戸を開き、若者を育てて行き、主宰だけが浮いた存在にならないように、スタッフと主宰ががちりとスクラムを組んで魅力ある俳誌を目指していかなければならないであろう。そこには主宰の目指している俳句の思想、魅力ある伝統俳句とはどのような作品であるか、という主張がなければならぬ。若い人も主宰の主義主張をよく知り共に学んで行けるかどうか見極めなければならぬ。

俳句は外国でも唯一誇れる日本固有の文学である。基本はしっかり学び、日進月歩である俳句の思想、花鳥諷詠の新しい道を目指して行くために俳誌の役割は大きいと思う。

「さわらび」七百号祝賀会に出席した。活気ある誌友の方々ががちりスクラムを組んで主宰を守り立てて行く中に若い力の活力も伝わって来て嬉しかった。

旬日記

汀子

平成十七年十月一日 菅屋ホトギス会

何よりも今日秋晴でありしこと  
鳥渡る空を旅路の帰路として  
露寒といひて心に期すること

十月二日 関西野分会

書き上げし稿に新酒の待つてをり  
みよしののなほ峡深き鹿火屋の灯  
封切つて新酒に祝がん杯高く  
新酒とて禁酒の戒を解くべきか  
伝説のごとく語りて鹿火屋守

十月三日 下朝句会

颯引く昔の浜と聞くばかり  
桜よりははじまつてある初紅葉  
十月三日 ロイヤル俳壇

梨むきし手のべたべたを持て余す  
欠席といふ秋冷の朝かな  
馬肥ゆる北の牧場の便り来し  
梨を剥きながら甘さを確かめて  
梨をむく一人に食べる人多し

十月八日 九州ホトギス同人会

霧晴るる期待はいまだ捨てざりし  
臆病な足山頂の霧を踏む  
髪濡れて霧の魔術につかまりし  
山頂の霧もかくやと惚きたまへ  
六甲の霧もかくやと惚きたまへ  
見えてあるやうに見える霧を見て  
霧ばかり見て来て足りし心あり

十月九日 九州ホトギス同人会

初紅葉少し進みて快晴に  
露寒の由布の雄岳を見る目覚め  
露ほどきたるより由布の立ち上る  
霧消えて昨日は遠し由布の旅  
十月十一日 大阪倶楽部  
うすうすもみぢ 由布の嶮薄紅葉

やゝ寒に取り戻したる旅疲れ  
山雀の来て高原の朝となる  
十月十一日 綿業倶楽部

風止みて一人の世界秋の声  
洋風と和風の心を急がせて  
秋声や旅の心を急がせて  
十月十三日 清交社

猪垣のいつも崩れる一部分  
杯高く菊の宴をしめくくる  
旅空に仰がん後の月とこそ  
みづうみに影を落として十三夜  
み吉野の近き横川の月いかに  
十月十四日 西の虚子忌

露乾きゆける山気に包まるる  
半世紀心通へる西虚子忌  
こんなにも山路明るく冷やかに  
十月十五日 中国ホトギス同人会

雨に発つ旅路はいかに十三夜  
の名の変わりし都会十三夜  
邂逅の思ひ果せし句碑の秋  
青空に雲は遊子や十三夜  
この辺は芒の負けてある大地  
十月十六日 中国ホトギス俳句大会

音立てぬ一人の湯浴み十三夜  
よるべなき闇を統べたる後の月  
十月十七日 アサヒカルチャー

秋晴を連れたる旅となりけり  
十月十七日 アサヒカルチャー  
快晴の旅路今宵は十三夜  
十月十八日 有恒俳句会

朝寒の家居ほどきて旅に発つ  
朝寒の仕事の手順ととのへり  
鳥渡る一群二群高速路  
朝寒や東京は又今日も雨  
十月十八日 無名会  
ここに又通行禁止秋祭

うそ寒しさらに風添ふ日なりけり  
言ふよりは言はざることのうそ寒し  
十月十九日 夏潮句会

スケジュール身に入む余日なきことも  
牡丹の霜除残し庭師去る  
未枯るる庭の明るさありそめし  
壺の芒庭の芒と通ひ合ふ  
先づ庭にはじまつてある冬構  
十月二十日 クラブ合局

露踏み朝の目覚めをうながせり  
熟れ過ぎの柿を好むと置かれあり  
心ここにあらざること露けしや  
十月二十一日 時雨句会  
東京にだけ秋雨といふ予報  
渡り鳥一陣二陣旅心  
かもされしもの猿酒と聞くばかり  
転勤の話突然鳥渡り  
ふたたびの単身赴任露けしや  
猿酒といはれ信じるほかはなく  
スケジュールあるかに今日も鳥渡る  
十月二十二日 句会と講演の会

冬瓜を炊いて足るてふ京女  
年尾忌の近し励みで行くことを  
これよりと思ふ日もあり秋惜む  
今日のこと今日片付けて冬近し  
十月二十四日 野分会  
一つづつ済めば肩の荷下りし秋  
新酒古酒間やりませねば秋深し  
十月二十六日 年尾忌

秋の旅忌日の心携へて  
年尾忌と言ひ慣れ二十七回忌  
露寒きこと忌日の心添ふ  
十月二十七日 きつりぎ云  
日の差せば露寒ほどけゆきにけり  
横川路の踏みて通りぬ草紅葉

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成十七年十月三日 はせを句会

山 莊 に 朝 霧 解 く ほ どの 風

榛 名 湖 の 靈 氣 吸 ひ 込 み 大 花 野

句 集 祝 ぎ 阪 神 祝 ぎ て 灯 下 親 し

早 紅 葉 と い ふ 標 高 に 来 り け り

十月五日 一水会

鳥 渡 る 山 尖 つ て 来 り け り

十月六日 蕉心会

秋 天 に 鳥 谷 サ ヨ ナ ラ ホ ー ム ラ ン

鳥 渡 る 隅 田 の 流 れ 母 と し て

長 月 の 永 遠 に 偲 べ る 人 と な り

秋 の 声 と も 彼 の 声 と も 偲 び

馬 肥 ゆ る 岡 田 阪 神 寿

白 菊 や こ こ に 座 り し 人 の こ と

梯 は こ の 白 萩 の 下 で こ そ

俳 人 の 視 線 を 浴 び て 鯊 を 釣 る

忘 れ ま じ 九 月 九 日 て ふ 忌 日

馬 肥 ゆ る や つ ぱ り 猫 に 鰹 節

十月七日 小江戸サミット俳句大会

大 江 戸 と 小 江 戸 を 繋 ぎ 秋 の 声

十月八日 日本伝統俳句協会茨城県支部会

風 に 乗 る よ り 木 犀 の 香 と な れ り

竹 の 春 常 陸 の 国 の ワ イ ナ リ ー

ム ー ト ン の ラ ベ ル に 灯 下 親 し め り

零 余 子 採 る 指 に 手 練 の あ り に け り

その 中 に 葡 萄 の 神 秘 詰 め ら れ し

十月十三日 土筆会堅田吟行

松 手 入 浮 御 堂 て ふ 手 捌 き に

湖 北 よ り 余 呉 よ り 確 と 秋 の 声

湖 北 よ り 膨 ら ん で 来 し 秋 の 雲

近 江 富 士 湖 北 の 風 に 粧 へ り

近 江 富 士 渡 り 鳥 へ と 尖 り た る

十月十四日 西の虚子忌

消 え て ゆ く 露 に 忌 心 を さ め け り

十月十五日 中国ホトトギス同人会

そ の 中 に 句 碑 も 露 け き 岩 と し て

人 小 さ く 台 地 の 秋 に 溶 け 込 め り

深 秋 の 風 ド リ ー ネ に ウ バ ー レ に

十月十八日 草木瓜会

空 室 の 数 多 ビ ル 街 そ ぞ ろ 寒

通 勤 の 靴 音 乾 き そ ぞ ろ 寒

草 の 実 と い ふ 一 塊 の 造 化 か な

実 を つ け て よ り 醜 草 で な か り け り

十月二十日 登高会

秋 の 日 や 北 半 球 と い ふ 生 活

日 表 と い ふ 初 紅 葉 濃 き 一 樹

小 鳥 来 て あ る 家 建 て 替 つ て あ る

秋 の 日 や 君 と は あ く ま で も 遊 び

十月二十五日 若水会

錦 秋 と い ふ 惑 星 の 一 部 分

銀 杏 を 見 付 け 忽 ち 主 婦 の 顔

忌 心 は 野 山 の 錦 越 え て よ り

錦 秋 の 六 甲 山 よ 摩 耶 山 よ

色 鳥 を 集 め て 色 を 変 へ ぬ 松

十月二十六日 年尾忌

年 尾 忌 や 危 ふ し 阪 神 タイ ガ ー ス

年 尾 忌 や ど う し た 松 山 下 柳

年 尾 忌 や 嗚 呼 金 本 よ 藤 川 よ

十月二十七日 目黒学園句会

濃 紅 葉 と い ふ 静 け さ に あ る 忌 日

野 の 風 を 聞 き し 五 感 に 秋 惜 む

紅 葉 し て 全 山 に 影 生 れ け り

十月三十一日 アサヒカルチャー若草句会

秋 の 空 人 が 造 り し 星 放 ち

秋 天 の 包 み 込 ん だ る 地 球 か な

秋 天 や 雲 押 し 上 げ て お し あ げ て

古 酒 と て も 虚 子 の 名 付 け し 銘 酒 か な

# 雑詠

## 廣太郎 選

ポストまで西日に封書かざし行く  
 春昼の犬吠えてをり誰か来る  
 一斉にめくる楽譜や春灯下  
 囀元気に過ぎてをりにけり  
 いつ来てもこの藤椅子が待つてをり  
 紫陽花にちがひなき色一と雨に  
 逝きし娘に会ひたしと泣く春の暮  
 連休に戻る娘の亡し藤の雨  
 筍を掘る力入れ力抜き  
 咲ききりて一枚となる鉄線花  
 黒南風や朝刊の記事伏せて卓  
 蝶もつれ話のもつれあるベンチ  
 子鳥の阿と母鳥伝とかな  
 夏帯といふはさらりと解くもの  
 江戸つ子の端くれとして初鯉  
 旅疲れ少し異国の月朧  
 旅疲れ癒す異国の蝶の庭

札幌 高橋笛美

同 同

同 同

大分 篠原樹風

同 同

高知 一宮十鳩

同 同

同 同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同 同

同 同

東村山 村松紅花

同 同

同 同

長岡 安原 葉

同 同

人立てば紫陽花色を加へけり  
 スコップに蝮姑の命をすくひたる  
 夜の卓に更けさくらんぼ赤くなる  
 山寺のつゝじ咲く辺の日ざし濃く  
 開山塔めぐらすつゝじ明りなる  
 兵の墓ことにつゝじの咲き盛り  
 睡蓮の花の輪廓正しけり  
 河骨の一輪抽きし水暗し  
 父の日に京よりの土産花山椒  
 謎多き彗星見ゆる夏に入る  
 異常なる寒冷前線夏来る  
 花の柄の残る葉桜のみどり  
 パリジェンヌあり日本に業平忌  
 本日も嘘もにせアカシヤの花  
 蚊遣火の一つに百畳なる雑魚寝  
 玫瑰の咲きし砂丘に年尾句碑  
 玫瑰や砂丘に來れば人は散り  
 玫瑰や東京兵庫人もある  
 弟に母やさしかり 柏餅  
 昔吾に弟居りし 柏餅  
 老いたりと思へば負けよ春の風邪  
 一声は空耳二声めは初音  
 初音聞く朝風新たなるものに  
 梅林の一樹一樹の一輪

大阪 告冬

同 同

福岡 松尾緑富

同 同

同 同

姫路 桑田青虎

同 同

同 同

榎原 稲岡 長

同 同

島原 中川萩坊子

同 同

同 同

熱海 嶋田一步

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

室蘭 山本晃裕

同 同

同 同

# 雑詠句評（九月号より）

憲明・芳子・静龍

千鶴子・美奇・葉

保佳・中正・むつみ

明倫・廣太郎

## 病み抜けし身に人の情花の情 名嵐 岩松草泊

大きな病を克服されたのであろう。「病み抜ける」は病をすっかり払って元気になることである。病氣を通じて人の情のありがたさを身にしみて感じられたのである。それに「花の情」が加わっている。俳句で「花」は桜の花である。さらに「花」は、「花鳥」「自然」の省略でもある。自然とともにあるのが俳句の生活。花の移ろいとともに関病はつづいた。自然はいっそう身近なものであった。「人の情、花の情」、俳句にたざさわつていることのありがたさを、しみじみと感じておられるのであろう。

（憲明）

御自身か、又は親しい知人が大病をされ、見事それを克服なさったのであろう。時期は恰も桜の花が爛漫の頃であった。人からの労りの言葉もあり、そして咲き満ちている花がまるで快癒を祝うように美しい。この花に思いを馳せ、喜びに満ちた心持ちになっている作者なのである。（廣太郎）

## 面積となりて爆布となりて落つ 大阪 蕪三郎

この句の滝は、普通高い谿谷から蕩々と落ちてくるのではなく、「面積となり」とあるので、幅広い堰をなして落ちる滝を写生されたものと思う。可成り広い堰で、処によつては二段にも三段にもなつて景観をなし、堰から落ちる水が爆布となつて音を立て、見事な写生句であり、雄大で如何にも涼し気である。こうした風景は時に見掛けるが、多くを語らず省略の効いた広大な写生句である。自ら情景が見えるようで、意図聞えてくるようである。（芳子）

一般的に滝を詠む時は、多くその水の進む方向、つまり高さや水の速さを表現して、一次元的な情景になっているのではないかと思うが、この句「面積」という言葉で見事にその横への拡がりをも表現している。つまり二次元的な拡がりがある。何倍も大きな「爆布」の動きが見て取れる。（廣太郎）

天地有情

子選

人悼むごと辛夷咲きこぶし散る 東京 稲畑廣太郎  
 辛夷咲き終る名妓の物語 同  
 新緑となりし吉野の山思ふ 長岡 安原 葉  
 葉の 日 黄 檠 林 の 残 る 山 同  
 み吉野やうしろの正面花の闇 大阪 佐土井智津子  
 み吉野の逢魔が時や花の雨 同  
 紫陽花や水の青経て空の青 榎原 稲岡 長  
 花合歡に蜂の恍惚真昼どき 同  
 小城下の真午の厨ほととぎす たつの 浅井青陽子  
 百寿すぐ更衣してあらたまる 同  
 円周が小さくなりし老の春 豊中 瀧 青佳  
 鬱々たる緑の中に我は在り 同  
 朴咲いて雨匂やかな夕べかな 神戸 長山あや  
 マロニエの咲かぬ一樹の孤独かな 同  
 ほる苦きものなど湯搔き春の暮 東京 橋本くに彦  
 豆飯の卓を囲みて平和かな 同  
 頭より目刺を食みて八十路過ぐ 徳島 上崎暮潮  
 稿債は追ひかけてくる木々芽吹く 同

涅槃図に描かれぬものの嘆きあり 福山 竹下陶子  
 涅槃図のなげく涙は描かざる 同  
 婿といふ息子がをりてあたたかし 熊本 岩岡中正  
 いつか詩を紡ぐ蚕とならんかな 同  
 朴咲いて一邸深山めきにけり 神戸 山田弘子  
 祭髪乗せて発ちたる山のバス 同  
 婚約を祝つて泣きし秋灯 鹿児島 西村 数  
 わが家より花嫁の出る五月来ぬ 同  
 中津とは諭吉の里よ鱧料理 大分 篠原樹風  
 蘭をさばく音より朝がはじまれる 同  
 ねんごろに衣裳合せの花衣 神戸 後藤比奈夫  
 山繭の色 山深く谷深く 同  
 行春もまた爛漫でありにけり 姫路 桑田青虎  
 ランチとる沖にヨットの見ゆる景 同  
 夕風の立ち降ろさるゝ鯉幟 福岡 松尾緑富  
 山内の夕べしきりと雨蛙 同  
 日本の子ら水遊びして真白 東京 坊城俊樹  
 峡ひとつ滴りにあり悉く 同

# 天地有情句評

汀子

人悼むごと辛夷咲きこぶし散る 東京 稲畑廣太郎

辛夷の花の咲いて散る現実を通して人の命を惜しむ作者。

薬の日黄檗林の残る山 長岡 安原 葉

自然の草木から採る薬の一つ。陀羅尼助の原料の黄檗林の残る吉

野山。

み吉野の逢魔が時や花の雨 大阪 佐土井智津子

黄昏どきの不気味な雰囲気。ましてや吉野に降る花の雨。

紫陽花や水の青経て空の青 檜原 稲岡 長

七変化とも云われる紫陽花の色への作者の興味。

百寿すぐ更衣してあらたまる たつの 浅井青陽子

矍鑠と歳を重ねて間もなく百歳の作者。季節の変化に対応する心

構えを忘れずに。

円周が小さくなりし老の春 豊中 瀧 青佳

行動範囲が小さくなったことを実感しながら日々を大切に。

朴咲いて雨匂やかな夕べかな 神戸 長山あや

朴の花の甘い香りが辺りを包み雨まで匂やかにしてしまふ。

ほろ苦きものなど湯掻き春の暮 東京 橋本くに彦

春の暮の茶事の会席の準備が始まっている。

頭より目刺を食みて八十路過ぐ 徳島 上崎暮潮

しっかりカルシウムなど栄養を摂っての作者の生活。